広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「甘え」と現在の日本社会と日本人の心理
Author(s)	クレア ウイーバー,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1996 : 101 - 112
Issue Date	1997-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039401
Right	
Relation	

「甘え」と 現在 の日本社会と日本人の心理

クレア・ウイーバー

はじめに

昭和49年に、精神科医の土居健郎は日本を理解するための新概念として「甘え」と言う概念を提唱した。その定義は、「. . . 乳児が母親に密着することを求めることである. . . 」と言うものである[1]。更に、その「甘え」の心理的作用は、日本人の精神活動や日本の社会構造を理解するためのキーワードであると主張し、それを『「甘え」の構造』と言うベスト・セラーの中に提示した。「甘え」と言う言葉は「甘える」という動詞の名詞形で、日本語の日常用語である。研究社の国語辞典によると意味は 外国人には理解しがたい言葉だが日本人は定義出来はないが意味は分かると土居は言っている。外国語には相当する言葉はなく、日本語独特の言葉だと思われる。日本語は特異なので日本人の精神構造の特異である、と土居は主張している。

当時、「日本人らしさ」を定義し説明するための様々な書物が、多数出版された。「日本人論」若しくは「日本文化論」に関する文献は、さまざまな概念を打ち立て、日本社会の特異性や、戦後の奇跡的ともいわれる急速な経済成長の理由を世界に伝えるため、また、それに加えて「日本人らしさ」[2]を伝えるために、外国人の著者によって数多く書かれた。しかし、その「日本人論」についての文献は、かなり学問的で、日常生活に関連したものではない。その文献の課題は、戦前の国家アイデンテイテイを再建することにあった。多くの「日本人論」について書かれている書物[3]に目を通したが、そこに書かれている 70年代からの概念は古く、現在の日本社会にも適応しうるかどうかは疑問である。特に、土居の「甘え」の概念は、本人の主張だけではなく、土居に定義された「甘え」に関する言葉、つまり義理と人情、他人と遠慮、外と内、裏と表、恥と罪なども今の日本社会に適応するかどうか、社会学者の間でしばしば議論されている。

研究の目的と方法

日本語・日本文化の研究生である私には日本社会と日本人を理解するのが重要である。そこで、日本の社会と心理構造を説明してくれる 「日本人論」と言う諸書物は言うまでもなく面白くて研究に役に立つ。しかしながら、それらの様々な概念は古く、現在の社会的にあてはまる例もあまり多くないので現在の「日本人・文化論」をもっと詳しく考えようと私は思った。よって、この 研究の目的は土居健郎の 「甘え」の概念を中心として現在の日本の社会構造と日本人の精神構造について考えるものである。「甘え」を基盤とするだけではなく、別の「日本人論」の概念と土居の「甘え」に関する用語を使って今の日本社会と心理を観察もする。

ここ数年間、日本の社会には色々な問題が起こり、日本の奇跡的な「バブル」経済成長が破れた。その崩壊の原因と言えば、社会変化と精神のかわりということにあるかもしれない。様々な「日本文化論」の著者によると、人間関係に存在している依存的な関係が日本の基盤であると言う。そこでこの研究では現在の日本の社会問題と日本人の精神的変化を「甘え」に関連づけて、議論しようと思う。現代の社会問題に関する文書、すなわち新

聞、雑誌、またジヤーナルを使い更に日本社会での体験と日本人との関わりもからめ、この研究は一年間日本で勉強した自分の体験の分析と言っても良いだろう。本研究で明らかにしようとしていることは現在の日本の社会と心理の状態であるため様々な若い日本人の、様々な意見と正しい社会状況を理解するため、調査のような観察もしている点である。調査の結果と文献研究を参考にし、まず日本の社会変化と「甘え」との関係を考え、次に日本人の精神構造と考え方の変化を考察する。またこの研究を広げるために「甘え」に関連する概念も現在の日本の社会に関連づけ今の状態を解明していく。

1.日本社会と「甘え」

第二次大戦後以来日本は急速な経済成長や高い生活水準のおかげで世界中に知られてきた。そんな「バブル」経済は特別の社会関係と精神構造に基づくと言われていた。更にその構造は日本独特のものと言われていた。戦後の三十年の間に日本人にとってこの独特奇跡的な成長は自慢するべきものになった。最近数年間、強国である日本は他の先進諸国のように急速な成長しすぎる経済成長の結果、昔の奇跡的「バブル」経済は崩壊し、社会構造は破れやすくなってきた。八十年代後半以来経済の不景気や政治的騒乱と共に社会問題が多くなってきた。それに加えて国家神道や仏教の権力が弱くなり、逆に新宗教の団体、たとえばオウム真理教や創価学会などが強くなってきいる。その上社会的な立場から見ると日本の急速な経済成長の影響は会社員の精神と家庭生活にも感じられる。土居健郎氏の「甘え」の概念を中心に現在の社会問題を一つ一つ考察すると、日本社会の現状が明らかになるであろう。

1.1 会社における「甘え」関係

日本独特の社会構造が見らるところは日本の社会である。戦後の経済成長は特別な社会の構成のおかげだと言われた。その構成とはグループの中の階層構造、つまり「タテ社会関係」である。この「タテ社会」と言うのは1970年に中根千枝[4]が提唱したもので、組織は親分子分の関係[5]から成る。米国の学者トマス・ローレンはこの階層構造が依存に基づいた権力を促進すると言っている。それで会社の典型は根源の親子関係のある家のように親族的組織である。日本人の精神科医宮本政於は日本のサラリーマンの精神構造の研究『在日日本人』で「・・・日本での組織社会は擬似母性的な役割をする・・・その内部にいる人たちを手厚く保護する・・・」と言っている[6]。

現代の日本社会は「タテ社会関係」がまだ残っている。新入社員にとって会社に入れてからは上司との父性的関係がお互いに大切な関係である。部下は上司に指導と援助という点から頼り、逆に上司は部下に手伝いという点から頼る。親分の役割を果たしている人には部下の繁栄の責任があり、その責任意識のうえに部下が上司に忠義の感覚を持って頼ることが出来ると言われている。その上この忠義を促進するための年功序列や終身雇用など制度は会社員に会社に守られている感じを与えるので会社員は会社に「甘える」ことが出来る。また終身雇用の制度に加えて「根回し」や「稟議性」も日本社会に存在している[7]。この二つの過度を通じて全員の希望と意見が集まって集団の決定になるためである。それで会社の内の平和が確立出来る。その結果全員は自由に互いに「甘える」ことができ

る。

日本が戦後以来最も悪い経済不景気を経験している今の会社構造は変わり始め更に会社の中の関係とサラリーマンの精神も変わり始めている。欧米諸国の会社には日本のような終身雇用と言う制度はなく、効率の悪い年老いた労働者の人件費は高すぎるので解雇する。最近日本も欧米のような制度を取り込み始めている。そうして日本の会社を母親に例えると、宮本によると、 会社の安全な環境が崩壊する時サラリーマンは母親から離れた寂しさを感じ、「甘える」ことが出来ない。日本のサラリーマンの性格は一般に上司と部下のに「甘え」の関係に特徴づけられるので欧米的条件である競争や解雇などが日本の制度に入ると、日本人の親分は部下に頼られることもなくなり、その上権力も弱くなる。そんな状態になると 「タテ」関係のバランスがなくなり、サラリーマンはストレスがたまり 仕事生活に不満が生じ、不信に満ちた性格となる。団体の中のアイデンテイテイを失って団体の構造は崩壊しはじめる。現在の日本人の労働者の会社と社会に対する不安は精神的問題になり家族生活にも影響を与える。

1.2 家族における「甘え」

日本のサラリーマンは会社という団体に属するだけではなく、同時に「イエ」という団体の構成員でもである。そういう「イエ」を「・・・存在心理構造はデリケートなバランスの上に成り立っている。だから構成員の一人が精神的なバランスを壊すと、その影響は全員に及ぶ」と宮本は説明する[8]。戦後の高度経済成長ではサラリーマンを中心に家族より仕事の方が大切だという意識が一般的となったが最近の経済不景気にはやはりサラリーマンの精神も変えられてきている。そういう変化は家族生活と家庭の全員の関係にも影響を及ぼす[9]。昔に比べると、現在の日本家族制度は崩壊していると言われている。全員の「甘え」関係を考えるとその崩壊の理由が分かるかもしれない。先に述べたように会社と同様に「イエ」の組織も階層構造である。 それに加えて家父長制でもある。親子関係に基づいた「タテ」構造である「イエ」は伝統的に一番強い権力を持っている人は父親であるという組織で、父親の権力は本家と支家の全員に及ぶ。それに対し父親は全員を守り皆が「甘える」ことが出来る。更に父親は中根千枝年数によると「・・・・社会に確立された価値観を代表する・・」という[10]。従っていわゆる「イエ」構造は夫婦と親子がお互いに「甘える」という関係を保証し、父親の権力を中心としたものである。

宮本によるとサラリーマンの精神変化と会社の発展は家族の生活を壊しているという。日本的残業ーすなわち毎日遅くまで会社に残り、たまに休日にも仕事ばかりする、また同僚との飲食習慣が「・・・人間性を蝕んでいる。」という[11]。 今の若い会社員は、そういう生活は人生にとって意味が無くリラックス時間もないため、気分が悪くなるなどマイナス面が多いのでもっと人間らしい制度が必要だと言っている。生活の理由だけではなく、会社の構造も変わってきている。すなわち終身雇用が少なり団体意識が弱くなっているのである。先に言ったように団体がサラリーマンを守れないためサラリーマンは迷子のような気持ちになってくる。会社に「甘えたい」けれども「甘える」ことが出来ズ、サラリーマンんの精神構造は崩れつつある。夫でもあり父親でもある家族の主は精神的なエネルギーが弱くなっており、本来家庭内で使われるべきエネルギーも弱くなっている。それに加えて、長時間残業をし、週末も働いているので、「イエ」は「父親不在」なる。こういう「父親不在」の結果父親が夜中にしか帰らないので子供の養育における役割が無くなり夫婦の話し合いの時間が減り、話し合って意志決定することも少なくなる。そして何よりも父親不在の結果子供と母親に対して権力が非常に弱くなり「イエ」構造が崩壊するよ

うになる。宮本氏によると「父親不在」は家庭崩壊の要因の一つだという。若い日本人もそういうの意見を持つ者が少なくない。一番強い人である父親がいない時子供は母親に依存する。それで「甘え」の対象は父親から母親へと移るのである

また「父親不在」の結果家族の中における、父親の権力が弱くなるのと逆に母親の権力が強くなるという。土居によると親子関係は一番純粋な「甘え」関係であり赤の「他人」でわないため、「・・・日本ではこのような親子関係を理想的なもと見なし、それ以外の人間関係をすべてこの物指しではかる傾向が在る。80年代以来、日本の「学歴社会」の重視のせいで母親の役割は子供教育成功を確立する・・・」と説明する[12]。出産してから、母親は子供の中に「甘え」意識を育て、日本の子供たちは母親に完全に依存する。同時に母親は社会的位置を受けるため、子供に依存する。それで、母親と子供の間、始めからお互いの「甘え」関係が生れて来る。更に母親と子供は不在がちな父親に「甘える」ことが出来ないので子供の生活に母親が大切な役割を果たす。その他の母親の役割を考えると、大学闘争以来の「教育ママ」という母親の役割が見えてくる[13]。60年代以来母親と子供との関係は「学校」を中心としたものになり「IQママ」なることばが生れたという。社会を目の前にして子供の教育における成功と母親の価値は密接な関係がある[14]。そういう依存を通して親子関係は「イエ」にとって一番大切なものになる。子供と家族の生活には母親の権力が最も強いそうである。

上に述べた例を考えると、現代の日本の家族制度は変わり、伝統的家父長制も崩れつつある。60年代の高度経済成長の企業戦士となった「父」の存在は薄くなり、家族成員数も減少して「核家族化」という現象がおきている。更に家族において権力を持つ人は父親から母親になりつつある。家族の崩壊の最大要因は、社会変化にあるのであろう[15]か、それとも父親不在にあるのであろうか。

1.3 政治と「甘え」

第二次大戦後原子爆弾で破壊され連合国側の軍指導部に降伏した日本は50年の間に世界の強国の一つになってきた。天皇による指導を奪ってから、政治家はイデオロギー的「親分」の役割を果たした。日本の経済的・社会的回復のため国民は政治家に依存した。政府と諸庁と省の努力と回復計画のおかげで米軍による占領後日本は30年以上かけて急速に成長した。その結果長い間、政府と省に対する公式的調査は行われなかった。昔の天皇制のように政治家は野放しとなっていた。そのまま政治は自分の役割を果たしながら続いたが、最近の10年間、日本の「バブル」経済は崩壊し、社会的問題が起こってきた。日本人は政治家に対する依存の関係を疑い始めた。社会的・政治的・宗教的問題の三つを考えると「甘え」との関連を見えてくる。

(i) 住専問題

戦後約30年間貯金、予算と税金政策また他の省の予算を通じて国を支配してきた大蔵省に対して現在非難の的となっている財務事務の調査は行われなってため、マスコミや政治家、企業社長等からの批判は表面化してこなかった。その理由は二つある。一つは明治時代からのスローガン「尊王攘夷」の意識がまだ残っているということ、もう一つは大蔵省は自分の税金事務を調査されたくなかったということである。従って1995年の住宅専門会

社が7つを国民の税金から7.7億円に助ける政府の公明のため世論を変えてきた[16]。日本の国民はなぜ1992年以来大蔵省が,その住専会社の負債がそれ程 悪くなるまで発表しなかったのか知りたがった。

政治的な言葉である「天下り」で表現される制度で、その住宅専門会社はそのほとんどが旧大蔵省員によって運営され[17]、日本の大銀行から資金援助を受け、大蔵省に支配されていたというである。その上、住専の借用者の多くがやくざ団体や大物政治家と関係があったことから、住宅専門会社と大蔵省の間の関係はお互いに「甘える」関係だということがはっきり分かる。その他日本政府つまり大蔵省はその住専から多くの金を受け取っていたのでそのような「甘え」の関係が出来上がったのかも知れない。従って大蔵省は住専を破産させる代わりに住専の負債を肩代わりするつもりであると言ってもよかろう。去年の英国の有名銀行Barings Bankの崩壊と比べると、英国銀行はBaringsと「甘え」の関係になかったので援助しなかったのだとある日本人記者は言っている。それに対し、日本政府は銀行や住専などとお互いに依存関係にあり、そのような事件が起こることを望まないため必ず援助する。しかしながら大蔵省と住専との関係は「甘え」と言っても良いが大蔵省と国民との関係は「甘え」ではないと言ってもよかろう。その結果大蔵省に対する世論は最近の2,3年間変わってきているのである。

(ii) 教育問題

新しい問題ではないのに最近の数年間国際社会に比べ日本の教育制度は厳しく批判されている。現在の教育制度は戦後工業基礎の崩壊後自然資源が不足している日本(例えばエネルギー資源はほとんど輸入され第一産業はほとんどない)が国の回復政策として発布した。日本政府は残っている資源、つまり人間を中心にしてあらゆる努力をした。教育を通して勤勉で、従順で、忠実な労働者人口を育てるためであった。戦後の学校制度はこの精神的調教の始まりであったと旧文部省員宮本は言う[18]。それに加えて「出る杭たれる」という諺は学校制度の中で成文化されていない規則で個人を厳しく支配した。

その結果個性と創造性が無視され日本は外来技術と科学を採用したが新機軸はほとんど無かった。戦後回復にはその水準は十分ではあったが二十一世紀が近づいている今日技術産業は日本の弱点となっている。宮本によると長期にこのような精神的調教は日本「システム」に束縛された依存的な労働人口を作り出すという、労働者は日本の「学歴社会」のため教育制度と「システム」に完全に依存し、その結果戦後回復が急速に進んだ。その依存関係はやはり「甘え」にからんだものだと言っても良い。日本の教育制度では「システム」の中で自分の安全を重視して文部省などに「甘える」と自分の希望がかなうのである。現在の日本社会には教育改革が必要であると宮本等は言っている。

(iii) 薬害エイズ問題

もう一つの世間と政府との信用関係が崩れた例は1995年に出た 厚生省と血友病の患者の血液汚染の問題である。大蔵省、文部省などと共に厚生省は戦後以来政府の機関として期待していた成信をこの薬害エイズ問題により失った。1982年以前日本の厚生省はアメリカの製業会社 から血液製剤を輸入した。しかし1982年以降その血液の中にHIVヴィルスでおせんされたものが現れた[19]。アメリカの疫病の研究所はこの事実を発見してからアメリカの政府にこの非可熱製剤を使わないように報告し、日本の厚生省にもその情報を伝えた。しかし厚生省はこの情報を無視し、その内容を一切マスコミに伝えないどころが、病

院や血友病患者にすら伝えなかった。その結果、医者と病院はこのことを知らずに出産後の女性の出血、血友病患者や輸血患者などの治療にこの非可熱製剤を使いつつあった。従って現在の日本人のエイズ患者の大半は欧米諸国のエイズ患者の大分が同性愛者であるのと違い血友病患者である。この責任はいったい誰が負うのであろうか。

この他にも厚生省は今年(1996年)の夏におきた集団食中毒事件批判をあびたのである。大阪府堺市で小学校の給食が0ー157バクテリアに汚染されこれまでに約6、000人が感染をした[20]。厚生省の反応というのは世間から見ると大変遅く、予防と報告が十分ではなかった。食中毒が広がり始めてから一週間がたっても患者以外の誰にも0ー157について知らせっていなかった。このようなことがあった結果、日本人の間では政府と政府機関は最近親分の役割に怠慢になって民衆の栄養と安全の心配をしていないとささやかれている。つまり国民と厚生省との間には「甘え」関係は感じられないと思われる。

1.4 新宗教団体 問題

先に述べたように最近新宗教の団体の活動は政治的・社会的問題となってきた。それがはっきり見られた例の一つは平成7年3月東京の地下鉄サリン事件であろう。神道のカルト団体オウム真理教によって起こされた事件は新宗教団体の問題を政治と社会の先頭に引っ張り出した[21]。しかしなぜこんな宗教関係のカタストロフィーがいいともたやすく起こったのか。その問題の要因の一つは新宗教の団体と政府との「甘え」関係、それに加えて団体と信徒との「甘え」関係にあるのかも知れない。私にその関係に「甘え」がかなり感じられた。

明治時代の国家制度は天皇が主人である、という制度で、明治時代の指導者によって作られ、戦前に日本人国民の間に「国家」のイデオロギーとして広まった。また当時の天皇は絶対であり、天皇の許可がないと政府はなにをするともできなかった。また天皇は神道と密接な関係にあったため、政府は神道に政策等の許可を求めるようになった。しかし戦後占領軍と連合隊の指導者によって天皇は神権を放棄させられた。その結果国家の宗教的イデオロギーも失われた。国家の主人としての天皇の権力が非常に弱くなり、国民は天皇と国家に「甘える」ことが出来なくなった。同時に仏教も神道と同様宗教的意味がなくなり伝統的文化的儀式都成った。神道と同様国民に対するイデオロギー的指導権力もだんだん弱くなってきた。社会的変化、都市化と近代化も国民が望んでいる新しいイデオロギーはもはや天皇や国家を中心としたものではなくなっていた[22]。特に田舎から大都市に新たに来た人々は自分が層していた団体から離れたために、独特を感じるようになり様々な宗教団体の権力対象となった。宗教的指導力が国家神道にはほとんど無くなり、戦後の日本の指導者は政治家になった。政府の努力で戦後三十の間に日本は再び強くなった。言うまでも無く日本は最近四十年の世界一強い国の一つになった。

宗教の代わりに政治が日本国民のイデオロギー的基礎を作った。国民の生活に最も強い影響力を持つのは政治と政府の機関であったのでそれらは宗教が今まで果たしてきた精神的欠陥を補った。しかしながら最近数年間日本の政府は政治の腐敗とスキャダルゆえに権力がだんだん弱くなってきている。こうして政府を中心としたイデオロギーはなくなり、それから今の新宗教団体が生れた。戦争最初の新宗教ブームに創価 学会は日蓮仏教の宗派として生まれた。最近のブームではオウム真理教も含め、神道や仏教から様々な宗は生まれた。都市化と近代化の時に生まれた創価学会は「イエ」のような集団を作り平和と友情をアピールし、孤独を感じている人々に層を広げた。オウム真理教の場合には昔から言われ続けた1999の世界崩壊から信者を守る、とアピールして信者を増やしていた。最近の

日本社会と政治状態から日本が近い将来、崩壊ということが多くの日本人に信じられている。この二つの団体は強い指導者が中心となっている。創価学会の池田大作とオウム真理教の麻原彰晃は個人崇拝を作った。生徒の場合は指導者と「甘え」関係ができてイデオロギー的に依存できる。その点池田や麻原には権力と神様のような崇拝をもって「甘える」ことが出来るのである。

新宗教団体と政治との関係も「甘え」の立場からも説明できる。戦後日本憲法の第20条の下で:

「(1) 信教の自由は何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。

(2) 何人も宗教の行為、祝典、儀式又は行事に参加することを強制されない。

(3)国及びその機関は宗教教育その他いかなる宗教活動もしてはならない。」

と指定され[23]、宗教団体は法律上自由と国家からの保護を手に入れる。その上政府による調査と税金が免除されている。創価学会の場合旧公明党と現在の新進党と関係があるのではないかと言われている。創価学会の会員の大半は池田大作の勧める衆議院候補者を投票する。野党の新進党にとって創価学会の支持は大切であり両方の間に依存的関係が存在する。オウム真理教の場合には麻原は政府の調査がないため自分の政治的希望つまり反政府運動と日本の終末のための準備ができた。終末の計画の第一歩は去年の東京サリン事件の後表面化した。要するに新宗教団体と信者と政治家の間には「甘え」の三角関係が存在しているのである。

2. 現在の「甘え」の心理

2.1 日本人の精神と「甘え」

『「甘え」の構造』で土居健郎は日本社会に見られる特徴的現象を「甘え」の心理から説明した。上で述べたように、そのような社会の特徴的現象は現在の社会でも見られるが、「甘え」の心理と現在の日本社会における日本人の精神にある精神構造を考えている。「甘え」と言う言葉は常用語にもかかわらず今日の日本社会ではなかなか聞くことができない。その上若い日本人は外国人のように「甘え」の意味がはっきり分からないようである。本研究のための、若い日本人の「甘え」についての意見と考え方は最も面白くて大切な者であった。次に現在の社会に現れる「甘え」の精神と、「甘え」に関連する概念、例えば恥と罪、本音と建前、義理と人情などについて考える。更に70年代以来日本人の精神構造が変わったかどうかについても考えることにする。

(i) 敬語の使い方

まず、「甘え」の心理に影響された日本人の精神と社会関係を考察しよう。日本人は相手に対して尊敬の気持ちを込めるため、敬語つまり丁寧語・尊敬語・謙遜語を使う。有名な著書『菊と刀』ルース・ベネデイクトは「・・・人と挨拶をし、人と接解する時は必ず、お互いの間の社会的間の性質と度合とを指示せねばならない。」と書いている[24]。異なる敬語を使うことができる、相手との階層制度の関係を示し、中根千枝の言う「タテ」

の社会関係も示すことができる。土居によると、その社会の「タテ」関係は「甘え」で充満していると言う。従って敬語というのは土居の「甘え」と中根の「タテ」社会の概念を含めて、相手に「甘える」ために、目上の者を敬うために全ての人間関係に使うものと言えよう。例えば 親子・師徒・先輩後輩や夫婦の関係には敬語が使われている。このような階層組織にあって自分の位置をはっきり知ることによって「タテ」関係が成立する。それで上の人と下の人に「甘える」ことが出来るのである。敬語を使うことによって相手に「甘えさせる」ことも出来る。その結果人間関係を結びつきが強くなる。敬語を使っている国は日本だけではなく世界中でこのような意識が見られる。

(ii) 両親との関係

日本人が特に欧米人と違う点の一つは両親に依存する期間が長いということである。欧米人の子供は小さい時から両親に自立した生活をすることを教えられる。先に見たように日本人の子供は欧米人に母親に完全に依存するよう育てられる。20代になっても両親の家で暮らしている若い日本人の数が多く、一人暮らしをしている大学生の数はかなり少ないということが言われている。それに加えて両親の家で暮らしている若者はまだ子供扱いされている場合もある。門限と規則また厳しい親としての権力の下で暮らしているので、一般的に若い日本人は西洋的自由ーつまり個人的自由がないという。すなわち日本人は小さい時から大人になるまで両親との間に密接な「甘え」関係があり、その「甘え」の心理の影響は現在でも見られる。日本人は子供の時だけではなく長間両親に依存するので西洋人に「甘えん坊」だと見なさせ、よく批判される。

(iii) 先輩・後輩 関係

先に会社における親分・子分という関係を説明したが浜口によると学生の先輩後輩関係にも同じような階層組織があるという[25]。小学生から大学生までこの先輩後輩関係が非常に大切なのである。日本人の大学生によると、入学すると先輩に完全に依存し、生活と勉強につぃて相談などが出来るようになる。逆に先輩は後輩に手伝いや協力を求めるという点で依存するという。この関係は入学してからの最初の関係なので卒業後も続くといわれる。関係の内容は一般的に次のようである。他の階層関係のように後輩は先輩に話す時には尊敬語を使ったり、先輩としばしば遊びに行ったり、先輩の期待にそうような応答をしたりする。例えば名前の代わりに「先輩」と言う肩書きを使うことによって「タテ」関係に入る。浜口によるとそのお変えしに先輩に「甘える」ことが出来るという[26]。よってこの親分子分関係も土居によって定義された根本的な親子の「甘え」関係の特質があると言えよう。

(iv) 集団主義

外国人である著者にとって最初の日本人のイメージは「日本人はいつも集団でいる」というものであった。すなわち著者の国であるイギリスに来る日本人は必ずツア・グループか出張しているサラリーマンの集団にいると私は思っていたのである。その結果、集団主義者が日本人のステレオタイプになった。実際ある日本人は日本では集団は強いが個人が弱いという。集団に属することは安全で自由に「甘える」ことが出来ると思われている。浜口によると「・・集団主義の下で個人と集団との「望ましい」あり方は個人と集団とが対立する関係ではなくて一体の関係になることである。」という。要するに日本人は「甘

え」関係を通して集団に属し、社会の中に自分の位置を見つけ出すのである。日本人の「タテ」と「内」の意識は現在の日本社会に強いみたい。自分が属している集団は皆互いの「甘え」関係で結ばれているので遠慮がなく、「内」になる。遠慮があって他人との義理の関係は「内」ではなくて「外」である。最初の「内」は自分の家族であると土居は言う。その他の例に学校のクラス、クラブ、大学のサークル等がある。日本人は自分の集団と一体感を持ち、伝統的に、個人の希望より集団の「希望」の方を大切にするのである。

(v) クラブ

強い一体感を持っている集団の例の一つに大学生のクラブがある。勉強以外の生活の中心は文化サークルあるとある日本人の大学生は言う。著者の体験によるとクラブの構造は特特にクラブに階層組織が顕著である。大部分の大学生はクラブかサークルの一つにしか属していない。更にそのクラブはクラブ活動中だけではなく遊びの中心になる。すなわち夜と週末には同じクラブの友達と時間を過ごすのである。クラブの構造は会社や家のように親分子分のような先輩後輩関係に基づいている。目上の部員に対して目下は尊敬語を使い、様々な手伝いや小さな仕事をする。その上先輩が上達するよう、自分の練習を止めてまでも先輩を手伝う、。クラブはいわゆる「内」の集団なので部員は皆互いに「甘える」ことが出来る。このような「タテ」関係の構造と「甘え」の意識が日本の次世代にも感じられるが、他の例も含め現在の若い日本人の心理は同様に続いていくのであろうか。

2.2 心理の変化

前の文章で述べたように、ある伝統的社会はこれからも続いていくであろうという予期は若い日本人の生活においてまだ感じられる。しかし今の若者は前の世代とは違う考え方を持っており新しい精神構造があるという。その精神とは「甘え」の依存から自己を独立させようとするものだという。格式ばった場合には階層関係を観察し、尊敬を表す。逆に友達と同僚などの関係はほとんど平等になっている。実際にスポーツクラブも先輩後輩の関係はもっと緩やかになり、敬語を使うことが少なくなってきているという。互いの「甘え」の関係はまだ残っているが、格式ばらない形にな ある。日本人の友人は権力の一種出あり、年上の世代にしか見られないように思えるという。例えば家族の関係、すなわち親子の関係であり国民と政治家の関係である。若い日本人の関係に「甘える」必要性が無くなってきているのである。

「甘え」は人間関係だけではなく、集団においても減りつつある。とはいえ西洋的個人主義にはまだ遠く集団主義は日本人の生活の中心である。しかし集団の中の個人主義は確実に強く成りつつある。昔は集団の利益のために働いていたが現在の日本では個人の希望を大切にし集団の希望が無視されてきている。現在の集団の構造は過去の30年の間に変化した。土居等の「日本人論」の時代以来集団の中心も変わった。「稟議制」と「根回し」というのは昔集団全員の希望を集め、全員が納得した結論に達し、それに対するためのものであった。日本人の大学のクラブ員によると今の集団生活は個人的な気を与える。皆集団の協力を自分の希望をかなえるために利用している。集団での基礎的価値はまだ「交互的依存」であるけれども、集団主義的な組織は個人の欲求を充足するものともなってきている。集団から離れて生活している若い日本人もやはりいる。ツアーグループの旅行の人気は無くなり、一人旅が特に若い女性の間で人気となっている。集団意識は一体感と安全のかげでまだ感じられるが、集まった若い日本人をよく見ると異なるファションやスタイルをしているが個人のファションなどの自由は明らかである。将来的には日本社会は西洋

的自由のような個人主義になるのではないたろうか。

その他の心理変化は権力と権力者に対しての意識である。最近の数年間旧式の日本の権力者の力が弱くなり、日本人の考え方も変わった。伝統的社会では権力者や指導者は尊敬されていた。しかし現在の日本では特に若い人達は権力者(例えは両親、先生、警察官、当局や政府機関など)に対して必ずしも尊敬しているとは言いにくい。伝統的権力が昔の強さを失った今、若い日本人は自分の指導者と権力者を探している。だからたとえば新宗教団体の指導者ー特に麻原彰晃などはそのようにして信徒の間に強権力を持ってきたのかもしれない。上から支配され続けてきた日本社会は昔からそういう意識を持っていた。しかし現在はこのことに対する反抗意識が芽生えてきたせいで、これまでの権力が崩壊しようとしている。。これまで尊敬された機関は今疑いの目で見られ、支配者が無視されている。要するに日本人の権力に対する意識が変わってきたと同時に権力者との「甘え」関係も変わってきているのである。指導者が支配かなどを失うと下にいる人はそれに「甘える」ことが出来ない。従って権力に力がなくなり、現状が崩壊する。ある「日本人論」によるとこの「甘え」関係の崩はあらゆる社会問題の原因となっている。特に政府の権力について考える時そのようなことがあるに違いないのではないだろうか[27]。

3. 結論

外国人である著者は最初社会心理学的な概念である「甘え」は理解しがたいのではんじかと考えた。しかし社会的・心理的な分野の二つに分けると現在の日本社会には「甘え」の例が見られる。本研究で「甘え」の概念と現在の日本との関係を考察した結果、表面的に様々な分野において「甘え」に関連している点を見つけた。

人間関係は全ての社会のレベルに存在する。日本社会では、その人間関係において土居の「甘え」や中ね千枝の「タテ」、「イエ」の概念、浜口の「間柄」、ベネデイクトの「恥文化」などの「日本人論」の概念存在することを上において証明した。他方、精神的な面を考えると、日本人の心理は「甘え」に対する態度を反映し、その精神変化は権力と指導者に対する態度を反映する。権力の関係を通して日本人は権力者に「甘える」ことが出来、安心や安全を得ることが出来る。要するに日本で権力が存在する所では「甘え」も存在すると言っても良いだろう。

日本の社会問題を見ると、前に述べたように「甘え」関係は弱くなればなるほど権力を失う。その結果、「甘える」ことが出来ない。、社会的なバランスは崩壊しつつある。社会問題を解決ため、日本人は精神的な問題と変化を解決策として考えるはずであろう。指導者や目上の人々との「甘え」の関係を再び強くすると、「甘え」は社会問題を解決する鍵となるかも知れない。

この研究を始めるまえに日本は独徴の社会構造と心理のおかげで強国になったと言われていた。そして同様に現在の社会の崩壊は精神的・政治的・宗教的・教育的・社会的な問題とも原因が共通しているのではないだろうか。本研究の中でその原因は「甘え」と権力との関係にあることを示した。

注:

1. 土居 (1980) 『「甘え」の構造』(東京:弘文堂) p.13

2. 杉本良夫&ロス・マオア(1995)『日本人論の方程式』(東京:ちくま学芸文庫) p.5

3. Dale, Peter (1982) 『The Myth of Japanese Uniqueness』(London: N issan Inst./Crook Helm) p.21

4. 中根千枝(1982)『タテ社会の人間関係』(東京:講談社) p.44

5. 同上書 p.64

6. 宮本政於 (1993)『在日日本人』(東京:The Japan Times) p.110

7. 浜口 (1988)『「日本らしさ」の再発見』(東京:講談社学芸文庫) p.265

8。宮本 (1993) p.111

9。同上書 p.81

10. 中根 (1982) p.90

11.宮本 (1993) p.79

12. 土居 (1980) p.34

13. Mitchell, Douglas (1976)『「Amaeru」』(Westview Press Inc.) p.47

14.De Vos , George (1973)『Socialisation for Achievement』(California: University of California Press) p.47

15. 土居 (1980) p.62

16. 毎日新聞 02.03.96

17. 「Time」November 25th 1995

18. 宮本政於 in The Japan Times Sunday July 14th 1996

19. 『論点'96』 文芸春秋 p.552ー557

20. 毎日新聞 18.08.96

21. 『論点'96』 p.394ー411

22. 『中央公論』(1995) 5月 p.31

23.『Japan: Profile of a Nation』(1995) (講談社) p.211

24. ルース・ベネデイクト(1983)『菊と刀』(東京: 社会思想社) p.47

25. 浜口 (1988) p.241

26. 同上書 p.242

27. Von Wolferen, Karl (1989) 『The Enigma of Japanese Power』(New York) p.229

参考文献

桜井哲夫、(1985)『ことばを失った若者たち』(東京:講談社学芸文庫)

桜井哲夫、(1993)『思想としての60年代』(東京: ちくま学芸文庫)

杉本良夫&ロス・マオア(1995)『日本人論の方程式』(東京: ちくま学芸文庫)

土居健郎、(1980)『「甘え」の構造』(東京: 弘文堂)

土居健郎、(1989)『「甘え」のさまざま」』(東京: 弘文堂)

中根千枝、(1982)『「タテ社会の人間関係』(東京:講談社)

宮本政於、(1993)『在日日本人』(東京:The Japan Times)

浜口 恵俊、(1988)『「日本らしさ」の再発見』(東京: 講談社学芸文庫)

ルース・ベネデイクト、(1983)『菊と刀』(東京:社会思想社)

『日本の論点'95』(1995) 文芸春秋

『日本の論点'96』(1996) 文芸春秋

『中央公論』(1995) 5月、6月

毎日新聞 1996 様々

Beasley, W.G.、(1990)『The Rise of Modern Japan』(London : Weidenfeld & Nicolson)

Dale, Peter、(1986)『The Myth of Japanese Uniqueness』(London: Nissan Inst./Crook Helm)

De Vos, George、1973)『Socialisation for Achievement』(California : University of California Press)

Hendry, Joy、(1995)『Understanding Japanese Society』(Oxford University Press)

『Japan : Profile of a Nation』(1995) (東京: 講談社)

Mitchell, Douglas、(1976)『「Amaeru」Mutual Dependency in Japanese Politics』(Westview Press Inc.)

Von Wolferen, Karl, (1989)『The Enigma of Japanese Power』(New York)

『Time』,『Newsweek』[英文] 1995、1996 様々

The Japan Times 1996 様々